
IMIFU

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I M I F U

【Nコード】

N 9 4 2 1 K

【作者名】

朝昼夜

【あらすじ】

意味不明ということがテーマです。

(前書き)

縦書きのほうがいいかもしれません。読む人のことをちっとも配慮していません…。

「人生とは、『イミフ』の一言に、尽きるとみた」といつて友人が僕の目の前で頸動脈をナイフでかつさばき、出血死亡した。

不運から振り返り血を浴びた僕は（この行為自体が『イミフ』だろ）と思いつつ、真紅の装飾が成されてしまったその真つ白なTシャツを見たところ驚いた。

僕からの視点から見ると振り返り血は、「IMIFU」という文字を形成していたのである。ゾツと背筋を寒くしながら、まさしくこの状態こそがイミフ、ということか、と人生の何たるかを多少悟った気になりつつ、ならば何故悟ったはずの僕の友人は頸動脈をかつさばいてしまったのだらう、と、疑問に思いつつ友人の家に何か手がかりは無いかと探索しつつ（つまり金目の物を探していたわけではなく、日記だとかノートだとか、彼の思索を探れる道具を捜索していたのだ）、僕は引き出しを開けたり冷蔵庫を開けたりしていた。すると、遂に日記を発見した。プラスチックの、洋服とか入れてある引き出しの一番奥に、日記は隠されていたのだ。（こんなところに隠しておくとは。意外とこういうのはわかりやすいんだ）と思いつつ、僕は亡骸を背に、キャンパスノートに書かれたその日記を、パラパラと読み、そして友人の、恋愛に対しての独自の思考、友人の、一人の女性への思い、一つの恋愛の始まりから終結までの経過、などなど。などなどと言ったが、結局恋愛のことばかりが書かれていたその日記。最後のページには『わかれた。もう嫌だ』と泣き言が、荒れた字で書かれてあった。

僕は（失恋で頸動脈をかつさばくとは、どんな神経してんだ）と尊敬しながらも呆れて、ため息を二回ほどついた。

そして、友人は僕のことを恨んだのだろうか、とふと、思った。だって、自殺する瞬間を見せ付けられたのである。誰だってトラ

ウマになる光景だ。しかも頸動脈をバツサリなどとは。僕自身の頸動脈がなんだかヒリヒリと熱を帯びてくるくらいだ。事実、僕は今先ほど起こった光景を、二度と忘れやしないだろう。

だが、疑問が生じる。彼が僕を恨む動機とは？そんなものは見当たらない、なぜなら僕は友人に、初めて出会ったのである。今日、初めて。

そう、僕と彼はネットで知り合った仲だ。僕は彼に依頼されたのである。『僕の友達になってください、一日でいいのです』、と。だから僕は金という報酬をいただくことを前提に、彼の友達になった。今日、一日だけ。そして、朝九時に僕は出発、山手線、電車に乗って、高円寺にあるという彼の住むアパートに向かった。彼に出会った。泣き腫れているナルシストチックな彼に、なんかいきなり語られて、そしたら彼は、僕の目の前で頸動脈をかつさばきとても奇妙奇天烈な友人として、僕の脳裏に染み付いた。最悪だ。

家賃が安いのが故にボロボロのアパート、から飛び出し、警察に連絡するべきだろうとも思ったが、躊躇した。何故か嫌な予感がしたためであって、それは確かなことでは無かったが、油断してはならないと思えた。だから僕は遺体をそのままにしてアパートの部屋を出る。外はもはや夜中。朝早くから友人のこのアパートに訪れたというのに、彼はずっと僕に雑談をかまして来ていた。おそらく、自害をする前にありつたけ話したいことを話したかったのだろう、と、今にして思えば感じる。

もう、本当に夜中だ。僕はどうしようかと思った。電車だつて出ちやいない程に夜中なのだ。他人に見られたらTシャツのことが怪しまれるかと思っただが、上着を着れば目立たなかつたし、多少見えたとしても『IMIFU』という文字になっているのだから、お洒落には見えないが、そういうデザインだとは思われるかもしれないから、まあ、アパートに痕跡を残しておくのも怖かつたし着替えも無いから、そのまま着てた。小道を歩く。しかし、閑散としている夜道を歩いている途中、巡回のパトカーに見咎められて『ちよつと

「その君、いい？」とお願いされた瞬間というものは、さすがに身体全身に電流が走ってしまい硬直した。硬直したということはやましいことがあるということであり、僕は余計に焦った。警官に察せられていやしなないかと思いつつ、『IMIFU』Tシャツを堂々と見せるべきか隠すべきか、迷った。そんな僕のことなどお構いなしに警官たちは「何してるの？」と親切風をなびかせながら問い掛けてくる。焦り、三十七 くらいの微熱を発生させるが、しかし僕だって負けてばかりはいられない。焦ってばかりはいられない。それでは社会的弱者になってしまう、などと強気を見せ、「あ、こんばんわ」と気さくに挨拶をする。警官は僕にこんばんわと返すかと思いきやそれはフェイントで結局返さず、僕に直進してきて尋ねる。

「あなた、人殺した？」って。

「んああ？」

って呻いた。呻くに決まっている状況だったから出てしまったその素っ頓狂は、警官たちの追及を許すばかりだった。

「殺ったんだね？」

「殺ったのか」

僕が人を殺したということを前提で話を進めて行くような強引さ。これは偶然だろうか、故意だろうか。どうやら故意らしく、警官たちは「こいつに違いない」と二人で耳打ちして、確認を二人の間でして、それで僕を無理矢理パトカーに押し込んだ。僕が嫌がる隙も見せず、警官たちは見事な連携プレー。ちゃっちゃんと右手左手が捕らえられ、何か技っぽいのを掛けられたまま、僕は歩いてきた夜道をパトカーで引き返すハメになった。で、友人の遺体があるはずのアパートに辿りつき、僕はあの亡骸を再び覗くのは御免だったのに抵抗できない。どうやら社会的弱者らしく、社会的強者の警官たちには僕の力など些細なる程度らしい。身動きを封じられたまま、廃墟のように古びたアパートに、三人で仲良くIN。暗闇に入った瞬間に、鉄分の成分。鼻腔にがっとなり込んできて、容赦なく、肺を満たしてくる。遺体からのパワーハラズメント。

友人はやつぱり、亡くなっていた。絨緞に血が染み込んでヨロ口ツパな模様になっていた。強盗が押し入った様子もない、血だけが異端な、六畳半。

天井の古ぼけを見ている彼は、恋に破れたそうだが、だからって死ななくても良いと思う。僕を巻き込むことは、なかったよ。

心の内で愚痴りつつ、警官たちの行動を横目でチラチラ伺っていると、何か押入れの奥から、取り出した、一枚の紙。で、警官は紙をじっくりと見てから、それで僕のことを憎しみて観察、なんで？って思う間も無いままに、僕は警官にぶん殴られて地面に横たわった。横たわったその隣に友人の遺体。一晩だけ人生を共にした友人こういってドラマチックを帯びてくるが、なんてことはなく、ただただ僕が言えることは一言で『困った』ということと『頬がヒリヒリする』ということだった。

「やつぱ手前がやつたんだなあ」

「ひでえもんだぜえ」

警官の割に口ぶりが荒い二人は、倒れている僕の、洋服の襟を掴み、持ち上げ、もう一回、殴。殴打。鈍い音をたてながらアパートを揺らす僕の身体、血の上を転がり、まだ転がり、黄ばんだ壁に背中をぶつけて、ミシシと廃屋部屋は悲しく鳴。僕の頬はまた、悲鳴。これは逃げなきゃあいかん、と立ち上がるうとしたが思ったよりパUNCHが効いていて、目が眩み前後曖昧なところに、また一発、拳がめり込んで来て、悲、鳴。ぐああと叫ぶ間もない、この警官どもが、俺をストレス発散のための道具にしてるんじゃないやねえだろうな、と心底ブチ切れつつも反撃が出来ない。俺は徹底的に弱者だということ。を公務員の前で痛感させられてしまう。嫌、といったところで、こら、と怒ったところで、相手にはどうにも適わないらしい。僕は弱気になったまま貧弱になり、白い薄明かりの中、意識が縮こまり、ついに喪失したのだった。

ハツとした。

そう、意識が回復したのだ。

相変わらず、廃屋部屋の中だった。黒目を下に動かせば、薄明かりの中、友人の遺体が、天井を眺めている。

僕にとつての、災難の元。彼が死んでいる。

不思議なことが二点、ある。

まず一点。なぜか、僕が彼を殺したことになっている。空間的に、状況的に、物的に。

先ほどまではせいぜい、状況的空間的に僕が殺した、と二人の警官に決定付けられただけだったのだと思う。そしてそれは証拠にはならないはずの事実だった。しかし、物的に、僕が彼を殺していた。たった今。なぜならば、僕は握っているのだ、血のしたたるナイフを。彼を斬殺したのであるう、ナイフを握っている。彼は胸元を血で赤くしている。マジックでは無い様子で、現実的に、ナイフという鋭利でズブつとされて、絶命させられてしまったのだろう。誰に？僕に。僕の胸元には赤いＴシャツ。全てが真っ赤なＴシャツ。そこにはすでに「IMIFU」は描かれていなかった。ただただ真っ赤なＴシャツが僕の目で映えていて、僕の皮膚にへばりついていて気持ちが悪い。これが目の前の友人の血だとしたら、なおのこと気持ちが悪い。なぜなら、彼とは今日が、初対面なのだ。彼がどういう人間だったのか僕は知らない。そんな彼の鮮血を身に浴びたということは、僕の身体の表面がびっちり覆われたということ、何だか不気味だ。嫌だ。さっさとシャツ脱ぎたい。ていうか、単純に血がへばりついていっているのって、気持ち悪い。

それが一点。次の点は、警官たちの様子が、おかしいこと。

汚らしい六畳半の部屋。その玄関は、やっぱり狭い。二人の人間が立つ余裕など、その玄関ではスペース的に無理があるのだ。それなのに、二人は玄関で納まっている。二人で組体操みたいな、妙なことをして、スペースに入り込んでいる。うまいこと体を捻ったりして、なんだか警官二人がオブジェみたいな奇妙な感じになっ

ていて、表情は優越感に浸っていた。いや、優越感というのは、僕

がそう捉えただけで、実際には悲しんでいるのかもしれないが、警官はその表情を一切崩さなかった。まるで、呼吸もしていない様子だった。オブジェな見た目のまま、身体も心も銅像になってしまったのだろうか。わからないが、彼らがあんなところにいるには、僕は逃げられない。現実的に僕が友人を殺してしまっている状況で、僕は逃げなくてはならないのに、何故逃がしてくれないのだろうか。それは警官が警官であるが故だろうか、どうしても、あんな、ことをしているのだろうか。

とにかく色々理解不能だが、これが「イミフ」ということならば、僕はその言葉を理解できる。それが意味する状況を理解することが、たった今できた。いや、誰だっ理解できるに決まっている。僕の身体ほどの大きさがある窓、を発見した。幸い警官はおかしくなっているのだから、そこから逃げ出そうと思った。で、僕はナイフを握り締めたまま、窓の鍵を開けようとした。その途中で、窓の外を見た。夜の闇が広がっているはずの外側を見た。すると、そこに女の人がいた。恐ろしい形相の彼女が、いた。

思わず叫んでいた。飛びのいていた。彼女は僕と同じように真っ赤な、しかしキャミソールを着ていた。唇が紅の、輪郭が縦長の、リングの貞子と同じくらい髪の毛の長い女だった。彼女は片手に、花。真っ青な花を持っていた。僕はその花の名前を知らなかったけど、一輪の花は、彼女の真っ赤なキャミとコントラストが激しくて、相俟って不気味だった。で、彼女は何か、ぼそぼそと、喋っていた。それは窓越しに、わずかに、僕の耳に届いた。

「ころしたのん」

彼女はこれを、何度も繰り返していた。僕に尋ねていた。彼女はジッと、僕を見つめていた。で、窓をガタガタとやり始めた。

「ころしたのん」「ころしたのん」「ころしたのん」

飽きるほどに繰り返しながら、窓を何度もガタガタ。

あまりに恐ろしかった。ホラー映画は得意な方だったのに、全然怖かった。あああ、って叫びたい気持ちにもなった。だけど、それ

さえも憚られた。下手に叫ぶと、窓が開いてしまつような気がした。何かにすがりたくなつて、友人の亡骸を再び、藁にすがる思いで見つた。

彼の首が無かつた。

「ひ」つて僕が呻いた瞬間に、窓が開いた。ガララララ、つて現実的な音をたてて、外の闇が開いた。

「ころしたのん」「ころしたのん」「ころしたのん」「ころしたのん」

青い花を持つたまま、真つ赤な彼女が入り込んできた。何度も口走りながら、僕の目の前でまで、口走っている。

「ころしたのん」

「ひ」

「ころしたのん」

「ひ」

「ころしたのん」

「ひ」

次第に面白くなつてきた。彼女も面白くなつてきたらしく、ころしたのんと呟いているのに、言葉が半笑いになっている。青い花を室内のどこかに放り投げてしまい、キャミソールの妖艶のまま僕にどンドン近づいてくるわけで、思わず僕は「まじですか」と感動した。彼女は美人だった。で、警官たちは背後から羨ましがっていた。「いいなあ」「いいなあ」と、銅像のままに羨ましがる彼らを放置して、僕は喜んでキャミに手を掛けようとした。その瞬間の光景、僕の視界に、友人が入り込んできたのだった。正確には友人の首。それが、外の闇の中で、浮遊していたのだ、ポワンポワンと、浮かびながら、僕を見ている。ただただミテイテ、僕は困窮。

「勘弁してください。すみません。すみません」

弁明で逃れようとした。首に向かって殺人に対しての謝罪。しかし彼は外の闇の中、ただ浮遊しているだけで僕を赦す気は無い様子だった。むしろ、僕を憐れんでいるのだった。なぜならば、彼は卑

屈に笑った。

「人生とは、イミフだよ」

彼は二度目の最期に、一度目の最期と同じ言葉を、僕に残したのであった。

こうして僕は難を逃れた。

女の人も消えていたし、警官たちも立ち去っていた。首の無い友人はそのままだったが、ナイフは僕の手にもはや無かった。

六畳半で、薄明かりの廃屋部屋で、立ち尽くす。

絨緞のヨーロッパの模様。プラスチックの洋服入れ。キャンパスノート。

僕は友人を背に、夜の闇へと、消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9421k/>

IMIFU

2010年10月8日14時53分発行